

| 順位表 |

検索結果

2014Jリーグ デイビジョン1 順位表【第34節】

総得点 : 774 試合平均得点 : 2.53

グラフ	順位	チーム	全体			ホーム		アウェイ			直近試合の勝敗	
			勝点	試合	勝	分	敗	得点	失点	得失点差		
	1	ガンバ大阪	63	34	19	6	9	59	31	+28	○△○○△	ACL出場
	2	浦和レッズ	62	34	18	8	8	52	32	+20	△○●△●	ACL出場
	3	鹿島アントラーズ	60	34	18	6	10	64	39	+25	△○○○●	ACL出場
	4	柏レイソル	60	34	17	9	8	48	40	+8	○○○○○	
	5	サガン鳥栖	60	34	19	3	12	41	33	+8	●○○△○	
	6	川崎フロンターレ	55	34	16	7	11	56	43	+13	●●●△○	
	7	横浜F・マリノス	51	34	14	9	11	37	29	+8	△●○○△	
	8	サンフレッチェ広島	50	34	13	11	10	44	37	+7	○△●△○	
	9	FC東京	48	34	12	12	10	47	33	+14	●△●△△	
	10	名古屋グランパス	48	34	13	9	12	47	48	-1	○△△○○	
	11	ヴィッセル神戸	45	34	11	12	11	49	50	-1	○●●●●	
	12	アルビレックス新潟	44	34	12	8	14	30	36	-6	○●○●●	
	13	ヴァンフォーレ甲府	41	34	9	14	11	27	31	-4	○○○△△	
	14	ベガルタ仙台	38	34	9	11	14	35	50	-15	●△△○●	
	15	清水エスパルス	36	34	10	6	18	42	60	-18	●○△●△	
	16	大宮アルディージャ	35	34	9	8	17	44	60	-16	●△●●○	J2降格
	17	セレッソ大阪	31	34	7	10	17	36	48	-12	△●△●●	J2降格
	18	徳島ヴォルティス	14	34	3	5	26	16	74	-58	●●●●△	J2降格

「全体／ホーム／アウェイ」タブを変更した場合、勝点、試合、勝、分、敗、得点、失点、得失点差の情報が切り替わります。

○ 90分勝 ● 90分負 △ 引分 □ 延長勝 ■ 延長負 ☆ PK戦勝 ★ PK戦負

第34節 新潟vs柏@デンカS 積雪の影響により中止 12/6 → 12/8

※1、2位クラブはAFCチャンピオンズリーグ2015本大会(グループステージ)より、3位クラブはプレーオフより出場

※天皇杯決勝に進出しているG大阪が天皇杯に優勝した場合は、4位クラブがAFCチャンピオンズリーグ2015の出場権を獲得

検索条件

年度	2014年
大会	Jリーグ デイビジョン1
節	最新節

順位表

検索結果

2014.Jリーグ デイビジョン2 順位表【第42節】

総得点：1124 試合平均得点：2.43

順位	チーム	全体			ホーム		アウェイ			直近試合の勝敗	
		勝点	試合	勝	分	敗	得点	失点	得失点差		
1	湘南ベルマーレ	101	42	31	8	3	86	25	+61	●○○○○	J1昇格
2	松本山雅FC	83	42	24	11	7	65	35	+30	○○○●○	J1昇格
3	ジェフユナイテッド千葉	68	42	18	14	10	55	44	+11	○△●○○	J1昇格プレーオフ
4	ジュビロ磐田	67	42	18	13	11	67	55	+12	△△△●△	J1昇格プレーオフ
5	ギラヴァンツ北九州	65	42	18	11	13	50	50	+0	○△●●●	J1昇格プレーオフ
6	モンテディオ山形	64	42	18	10	14	57	44	+13	●○○○●	J1昇格プレーオフ
7	大分トリニータ	63	42	17	12	13	52	55	-3	○○●●●	
8	ファジアーノ岡山	61	42	15	16	11	52	48	+4	●●○△○	
9	京都サンガF.C.	60	42	14	18	10	57	52	+5	△○△○△	
10	コンサドーレ札幌	59	42	15	14	13	48	44	+4	○△△△△	
11	横浜FC	55	42	14	13	15	49	47	+2	○△●●○	
12	栃木SC	55	42	15	10	17	52	58	-6	△●○○○	
13	ロアッソ熊本	54	42	13	15	14	45	53	-8	○○○△○	
14	V・ファーレン長崎	52	42	12	16	14	45	42	+3	●○△●●	
15	水戸ホーリーホック	50	42	12	14	16	46	46	+0	△△○●●	
16	アビスパ福岡	50	42	13	11	18	52	60	-8	△●●△●	
17	FC岐阜	49	42	13	10	19	54	61	-7	●●●○△	
18	ザスパクサツ群馬	49	42	14	7	21	45	54	-9	●●△△○	
19	愛媛FC	48	42	12	12	18	54	58	-4	△●●●○	
20	東京ヴェルディ	42	42	9	15	18	31	48	-17	△△△△○	
21	カマタマーレ讃岐	33	42	7	12	23	34	71	-37	△△△●●	J2・J3入替戦
22	カターレ富山	23	42	5	8	29	28	74	-46	●○△●●	J3降格

「全体／ホーム／アウェイ」タブを変更した場合、勝点、試合、勝、分、敗、得点、失点、得失点差の情報が切り替わります。

○ 90分勝 ● 90分負 △ 引分 □ 延長勝 ■ 延長負 ☆ PK戦勝 ★ PK戦負

検索条件

年度 2014年
大会 Jリーグ デイビジョン2
節 最新節

順位表

検索結果

2014明治安田生命 J3リーグ 順位表【第33節】

総得点 : 495 試合平均得点 : 2.50

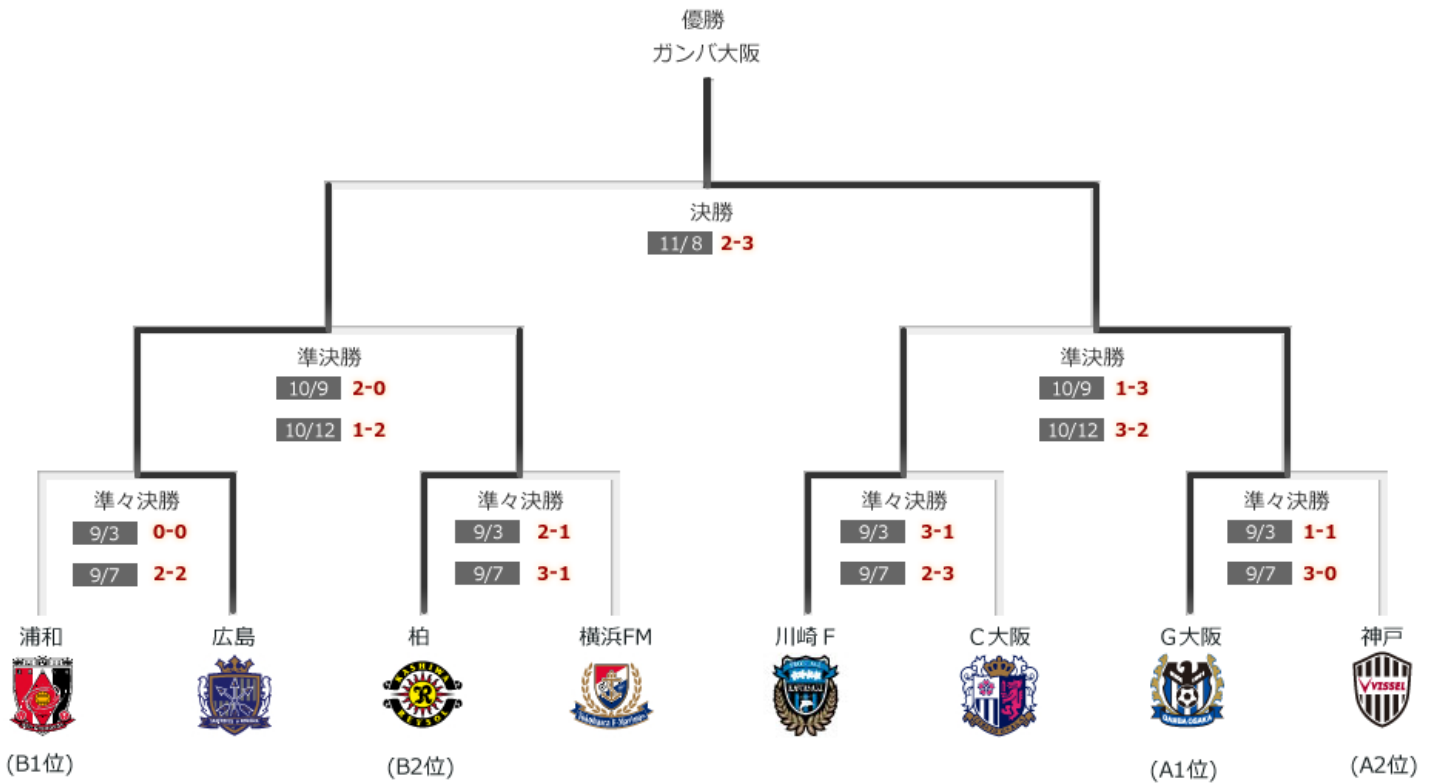
グラフ	順位	チーム	全体			ホーム		アウェイ			直近試合の勝敗	
			勝点	試合	勝	分	敗	得点	失点	得失点差		
	1	ツエーゲン金沢	75	33	23	6	4	56	20	+36	○○○○○	J2昇格
	2	AC長野パルセイロ	69	33	20	9	4	58	23	+35	○△○○○	J2・J3入替戦
	3	FC町田ゼルビア	68	33	20	8	5	59	22	+37	△○○○○	
	4	ガイナレ鳥取	53	33	14	11	8	34	25	+9	●●○○△	
	5	グルージャ盛岡	45	33	12	9	12	43	39	+4	△○●●△	
	6	SC相模原	43	33	12	7	14	44	48	-4	●○○○●	
	7	福島ユナイテッドFC	36	33	9	9	15	30	38	-8	●●●○○	
	8	ブラウブリッツ秋田	34	33	10	4	19	38	57	-19	○●○○△	
	9	FC琉球	34	33	8	10	15	31	50	-19	△○●●●	
	10	Jリーグ・アンダー22選抜	33	33	9	6	18	37	63	-26	△●●○△	
	11	藤枝MYFC	30	33	7	9	17	36	52	-16	○△●●●	
	12	Y. S. C. C. 横浜	24	33	4	12	17	29	58	-29	△●●●●	

「全体／ホーム／アウェイ」タブを変更した場合、勝点、試合、勝、分、敗、得点、失点、得失点差の情報が切り替わります。

○ 90分勝 ● 90分負 △ 引分 □ 延長勝 ■ 延長負 ☆ PK戦勝 ★ PK戦負

検索条件

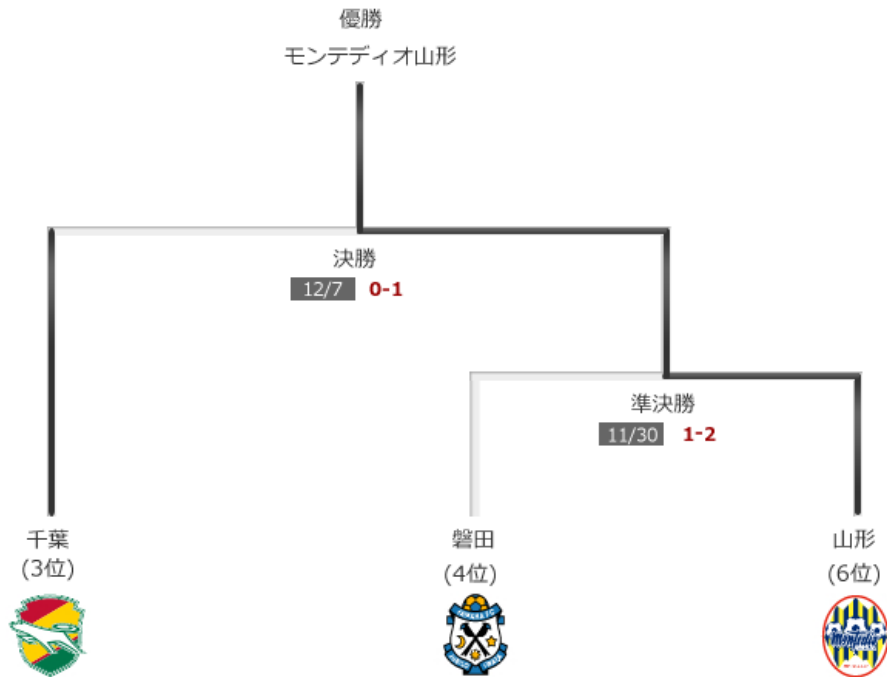
年度	2014年
大会	明治安田生命 J3リーグ
節	最新節



※準々決勝・準決勝/第1戦はトーナメント表右側のチームのホームゲームとし、第2戦は左側のチームのホームゲームとする
ただし、広島が準決勝に進出した場合のみ、準決勝第1戦は広島のホームゲームとし、第2戦は柏vs横浜FMの勝者のホームゲームとする
決勝/トーナメント表左側のチームをホーム扱いとする

検索条件

年度	2014年
大会	Jリーグヤマザキナビスコカップ 決勝トーナメント
節	決勝



90分間の試合を行い引き分けの場合は、延長戦を行わず、年間順位が上位のクラブを勝者とする。

年度	2014年
大会	J1昇格プレーオフ
節	決勝

入場者数

リーグ戦

J1 第34節

(人)	平均比較	合計	平均
2014年度	14	5,275,387	17,240
2013年度	-	5,271,047	17,226
前年比	100%		

J2 第42節

(人)	平均比較	合計	平均
2014年度	-76	3,043,948	6,589
2013年度	-	3,079,181	6,665
前年比	99%		

J3 第33節

(人)	平均比較	合計	平均
2014年度	-	444,966	2,247

リーグカップ戦

(人)	平均比較	合計	平均
2014年度	119	523,221	9,513
2013年度	-	516,684	9,394
前年比	101%		

J1昇格プレーオフ

(人)	平均比較	合計	平均
2014年度	8,387	46,743	23,372
2013年度	-	44,954	14,985
前年比	156%		

受賞情報の事前配布は、当日ご取材いただく皆様へ、円滑な取材活動を行っていただくために実施するものです。
 配布の対象は本日ご取材いただく報道関係の皆様のみとなります。
 受賞情報の一般への公開、情報解禁は各賞発表後となります。
 表彰式開始前の受賞者への取材、受賞情報について関係者のコメントを取るなど、報道関係の皆様以外が受賞情報を知ることとなる活動は、固くお断りいたします。
 表彰式開始前に、受賞情報の公開、受賞者への接触などがあった場合は、来日以降は受賞情報先渡しの実施を見送らせていただきます。
 なお、受賞者情報は、表彰式終了後に、Jリーグメディアチャンネル、Jリーグ公式ホームページに掲載いたします。

●最優秀選手賞 Player of the Year

出場・得点は2014 Jリーグ J1リーグ最終終了時/GKの得点欄()内数字は失点

ポジション	選手名	チーム名	生年月日	出生地	2014 J1		最優秀選手賞	過去の受賞
					出場	得点		
MF	遠藤 保仁	Yasuhito ENDO	1980/1/28	鹿児島県	34	6	初	

(最優秀選手賞受賞回数は、今年を含む)

※ガンバ大阪からの最優秀選手賞選出は2人目(1人目:アラウージョ(2005))
 ※日本人の最優秀選手賞受賞は13回目、12人目(中村俊輔(横浜FM)のみ2回受賞:2000-2013)

●ベストイレブン Best Eleven Players

ポジション	選手名	チーム名	生年月日	出生地	2014 J1		ベストイレブン	過去の受賞
					出場	得点		
GK	西川 周作	Shusaku NISHIKAWA	1986/6/18	大分県	34	(32)	3	3年連続3回目:2012、2013、2014
DF	太田 宏介	Kosuke OTA	1987/7/23	東京都	34	1	初	
DF	森重 真人	Masato MORISHIGE	1987/5/21	広島県	33	1	2	2年連続2回目:2013、2014
DF	塩谷 司	Tsukasa SHIOTANI	1988/12/5	徳島県	32	6	初	
MF	柴崎 岳	Gaku SHIBASAKI	1992/5/28	青森県	34	6	初	
MF	武藤 嘉紀	Yoshinori MUTO	1992/7/15	東京都	33	13	初	
MF	レオ シルバ	Hugo Leonardo Silva Serejo (LEO SILVA)	1985/12/24	ブラジル	33	6	初	
MF	遠藤 保仁	Yasuhito ENDO	1980/1/28	鹿児島県	34	6	11	11回目:2003~2012、2014 ※歴代最多
FW	大久保 嘉人	Yoshito OKUBO	1982/6/9	福岡県	32	18	2	2年連続2回目:2013、2014
FW	宇佐美 貴史	Takashi USAMI	1992/5/6	京都府	26	10	初	
FW	パトリック	Anderson PATRIC Aguiar Oliveira	1987/10/26	ブラジル	19	9	初	

(ベストイレブン受賞回数は、今年を含む)

●得点王 Top Scorer

ポジション	選手名	チーム名	生年月日	出生地	2014 J1		得点王	過去の受賞
					出場	得点		
FW	大久保 嘉人	Yoshito OKUBO	1982/6/9	福岡県	32	18	2	2年連続2回目:2013、2014

(得点王受賞回数は、今年を含む)

※2年連続の受賞は3人目(2009-2010:前田 遼一(磐田)、2010-2011:ケネディ(名古屋))ノ単独受賞で2年連続は初
 ※川崎フロンターレからの得点王選出は3回目(2007:ジュニーニョ/2013:大久保 嘉人)

●ベストヤングプレーヤー賞 Best Young Player

ポジション	選手名	チーム名	生年月日	出生地	2014 J1	
					出場	得点
MF	カイオ	CAIO	1994/4/19	ブラジル	30	8

※外国籍選手の受賞は初
 ※鹿島アントラーズからの選出は3人目(1997:柳沢 敦、2012:柴崎 岳)

●最優秀ゴール賞 Goal of the Year

ポジション	選手名	チーム名	生年月日	出生地	2014 J1		最優秀ゴール賞	過去の受賞
					出場	得点		
DF	西 大伍	Daigo NISHI	1987/8/28	北海道	23	3	初	J1リーグ戦第18節(8/2開催) 鹿島 vs 広島(カンマ) 70分 月間ベストゴール受賞:1回(8月)

(最優秀ゴール賞受賞回数は、今年を含む)

●フェアプレー賞(高円宮杯) Fair Play Prize(Prince Takamado Cup)

サンフレッチェ広島	Sanfrecce Hiroshima	3年連続4回目の受賞※歴代最多(2010、2012、2013、2014) ※フェアプレー特別賞(1993、1994)
-----------	---------------------	--

●フェアプレー賞(J1) Fair Play Prize(J1) ※反則ポイントが少ない順に記載

ベガルタ仙台	Vegalta Sendai	J1での受賞:2年連続2回目の受賞(2013、2014)、J2での受賞:2回(2008、2009)
浦和レッズ	Urawa Reds	初受賞
横浜F・マリノス	Yokohama F・Marinos	2回目:2010、2014
アルビレックス新潟	Albirex Niigata	初受賞
徳島ヴォルティス	Tokushima Vortis	初受賞

●フェアプレー賞(J2) Fair Play Prize(J2) ※反則ポイントが少ない順に記載 ★=賞金授与対象

★ 松本山雅FC	Matsumoto Yamaga F.C.	2年連続2回目の受賞(2013、2014)
ギラヴァンツ北九州	Giravanz Kitakyushu	初受賞
京都サンガF.C.	Kyoto Sanga F.C.	初受賞
フジアーノ岡山	Fagiano Okayama	2年連続2回目の受賞(2013、2014)
モンテディオ山形	Montedio Yamagata	J1での受賞:2回(2009、2010)
湘南ベルマーレ	Shonan Bellmare	初受賞
ザスパクサツ群馬	Thespakusatsu Gunma	初受賞
ジュビロ磐田	Jubilo Iwata	J1での受賞:1回(2009/高円宮杯)

●フェアプレー賞(J3) Fair Play Prize(J3) ※新設/反則ポイントが少ない順に記載 ★=賞金授与対象

★ 福島ユナイテッドFC	Fukushima United FC	
AC長野パルセイロ	AC Nagano Parceiro	
藤枝MYFC	Fujieda MYFC	

●フェアプレー個人賞 Fair Play Prize (Individual)

ポジション	選手名	チーム名	生年月日	出生地	2014 J1		フェアプレー個人賞	過去の受賞
					出場	得点		
GK	西川 周作 ※1	Shusaku NISHIKAWA	1986/6/18	大分県	34	0	初	
FW	工藤 壮人	Masato KUDO	1990/5/6	東京都	34	7	初	
DF	平岡 康裕	Yasuhiro HIRAOKA	1986/5/23	静岡県	34	5	初	
MF	森岡 亮太	Ryota MORIOKA	1991/4/12	兵庫県	34	4	初	
DF	水本 裕貴 ※2	Hiroki MIZUMOTO	1985/9/12	三重県	34	1	初	
FW	豊田 陽平	Yohei TOYODA	1985/4/11	石川県	34	15	初	

※1-ベストイレブン受賞選手がフェアプレー個人賞を同時受賞するのは4回目(2009:川島 永嗣(川崎F)、2010:横野 智章(広島)、2012:佐藤 寿人(広島))*クラブ名は当時所属

※2-サンフレッチェ広島からのフェアプレー個人賞受賞は6回目/歴代最多

●最優秀監督賞 Manager of the Year

監督名	チーム名	生年月日	最優秀監督賞	過去の受賞
長谷川 健太	Kenta HASEGAWA	1965/09/25	初	

※1992Jリーグヤマザキナビスコカップ以降、Jリーグ選手経験がある監督が、最優秀監督賞を受賞したのは4名(2006:ブッフバルト(浦和)、2010:ストイコビッチ(名古屋)、2012-2013:森保 一)

*いずれの監督も、選手として所属していたクラブでの優勝

●最優秀主審賞 Referee of the Year

氏名	生年月日(出生地)	担当試合数			
		J1主審	J1副審	J2主審	J2副審
西村 雄一	1972/04/17(東京都)	2014	15	0	10
6年連続 6度目の受賞 ※歴代最多(2009、2010、2011、2012、2013、2014)	国際主審	通算	205	15	85

●最優秀副審賞 Assistant Referee of the Year

氏名	生年月日(出生地)	担当試合数			
		J1主審	J1副審	J2主審	J2副審
相楽 亨	1976/06/25(栃木県)	2014	0	13	0
6年連続 7度目の受賞 ※歴代最多 (2007、2009、2010、2011、2012、2013、2014)	国際副審	通算	0	164	0

●Jリーグベストピッチ賞 J.LEAGUE Best Pitch

NACK5スタジアム大宮	NACK5 Stadium Omiya	16試合開催	2回目:2011、2014
IAIスタジアム日本平	IAI Stadium Nihondaira	16試合開催	7年連続 8度目: ※歴代最多 2004、2008、2009、2010、2011、2012、2013、2014
豊田スタジアム	Toyota Stadium	10試合開催	初受賞
北九州市立本城陸上競技場	Honjo Stadium	21試合開催	初受賞

功労者表彰 Special Service Award

●功労選手賞

氏名	生年月日(出生地)	Jリーグ最終所属	J1出場	J1得点	J2出場	J2得点
伊藤 宏樹	1978/7/27	川崎フロンターレ	236	4	154	5
岡野 雅行	1972/7/25	ガイナレ鳥取	301	36	69	6
ジュニーニョ	1977/9/15	鹿島アントラーズ	264	116	78	65
服部 年宏	1973/9/23	FC岐阜	381	19	185	1
波戸 康広	1976/5/4	横浜F・マリノス	358	2	-	-
山田 暢久	1975/9/10	浦和レッズ	501	25	39	2
吉田 孝行	1977/3/14	ヴィッセル神戸	356	53	114	33
ルーカス	1979/1/3	FC東京	268	90	23	9

功労賞、功労審判員賞は該当者なし

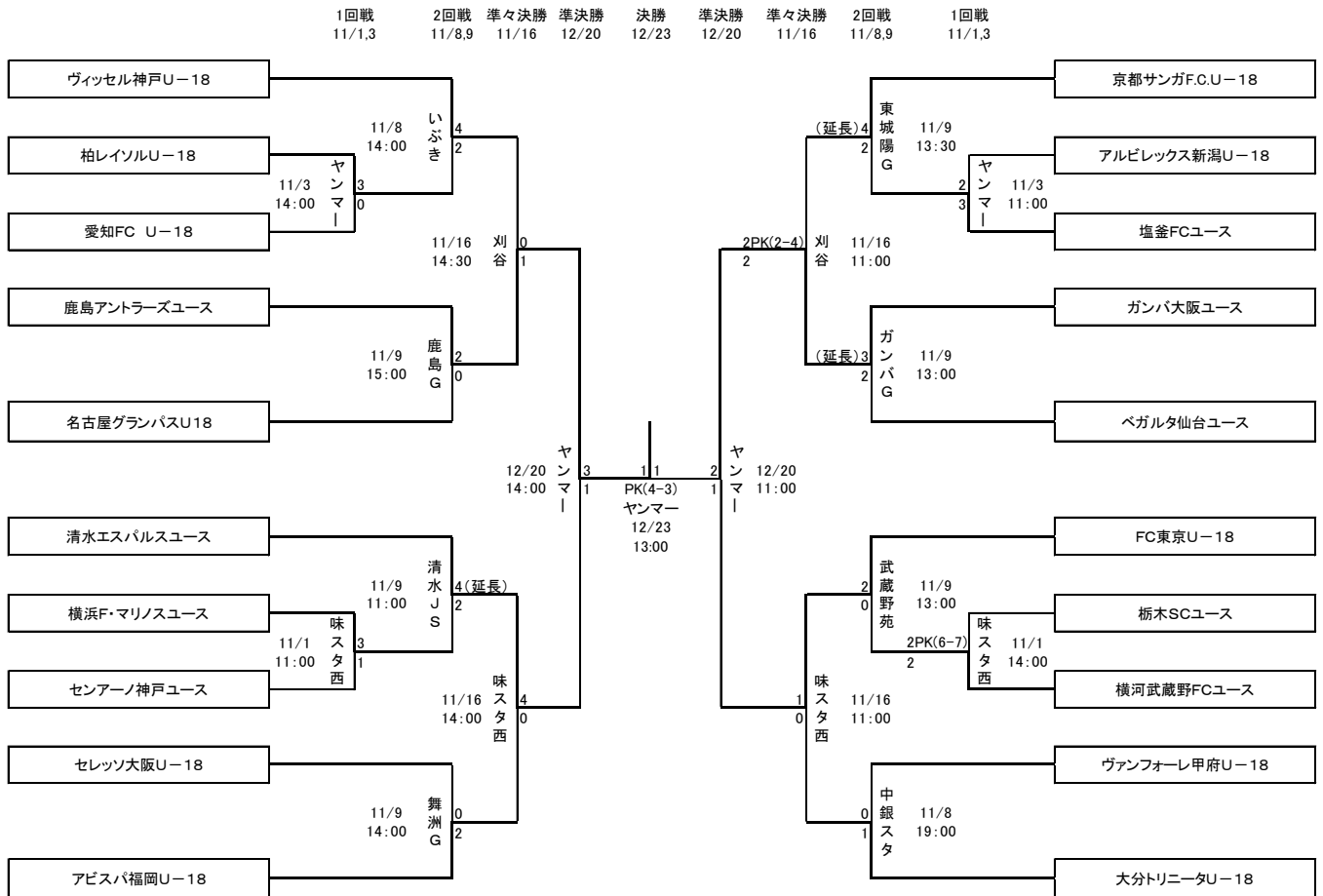
●最優秀育成クラブ賞 Best Youth Scheme

東京ヴェルディ	2回目:2011、2014
---------	---------------



NEWS RELEASE

【トーナメント表】



11/16(日)準々決勝 神戸vs鹿島(刈谷) 第1試合延長・PKのため、14:00→14:30開始に変更
 ※ トーナメント表の上側に記載のチームをホームチーム扱いとする。
 ※ 決勝については、表の左側に記載のチームをホームチーム扱いとする。

以上



J.LEAGUE
NEWS RELEASE



報道関係各位

(1枚目/全3枚)

2014年12月27日

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ

2014Jリーグ チェアマン総括

【3つのフェアプレーの推進】

今年1月のチェアマン就任に際し、Jリーグを世界に誇れるオープンかつフェアなリーグにしたいと抱負を述べました。「ピッチ上のフェアプレー」、クラブ経営の透明性を高めて安定した土壌の上にリーグの発展を目指す「ファイナンス・フェアプレー」、誰もが安心してスタジアムの非日常空間を楽しみ、オープンでクリーンなリーグであり続けるための「ソーシャル・フェアプレー」という「3つのフェアプレー宣言」を行い、2014シーズンを迎えました。

全ての試合を終えて振り返ると、異議・遅延行為が減少し、フェアプレー賞受賞がJ1・J2で前年の8クラブから史上最多の14クラブに増えました。選手やチームがピッチ上のフェアプレーに意欲的に取り組んだ証しであるといえます。

ファイナンス・フェアプレーにおいては、クラブライセンス制度の判定猶予期間である3年目で、J1、J2とも債務超過クラブ、3年連続赤字クラブが初めてゼロとなる見込みです。各クラブの事業規模も広告料や入場料といった営業収入が伸び、チーム人件費など営業費用も増加しました。全体的に緩やかながら拡大均衡型の経営となりつつあります。経営の健全化とともに、事業規模が徐々に拡大してきたといえます。

また、クラブライセンス導入以降、スタジアムの改修や新設の機運が高まり、長野や大阪、京都、北九州、沖縄などで新しいスタジアムが誕生します。今後計画されるスタジアムは、単にサッカー観戦の環境整備にとどまらず、商業施設、防災機能などを有した複合施設が理想です。そのため「スタジアムで街づくりを」というコンセプトのもと、用地面積や場所に見合った街づくりのプラン、資金調達法やスタジアムの事業収支計画なども含めて提案を行っております。

一方、3月8日の浦和レッズ対サガン鳥栖における差別的横断幕の掲出や、横浜F・マリノスサポーターの人種差別的な行為が大きな社会問題となりました。スタジアム観戦のあるべき姿が問われ、日本サッカー界全体がソーシャル・フェアプレーの重要性を再認識する年でもありました。浦和、横浜FMの両クラブはファン・サポーターと共に、もう一度、フェアで愛されるクラブをつくるという強い覚悟を表明し、問題へ真摯に向き合い、再生に尽力しました。その結果、浦和は無観客試合という試練を乗り越え、第32節のガンバ大阪戦では今シーズン最多となるファン・サポーターがスタジアムに駆け付けるなど、リーグ戦2位の成績を残しました。横浜FMも幾度となくサポーターとミーティングを重ね、クラブ・選手・サポーターが一丸となって問題と向き合い「FAIR PLAY, FAIR SUPPORT」のメッセージを社会へ発信し続けています。

【+Quality プロジェクト】

開幕前には、お客さまに本当に見ていただきたいサッカーを実現するために、+Quality（プラスクオリティー）プロジェクトの重点実施項目として、選手、監督、レフェリーを含めた全ての関係者と、試合の魅力をそぐ行為の減少を目的に「笛が鳴るまで全力でプレーする」「リスタートを早くする」「時間稼ぎや見苦しい交代をやめる」という「3つの約束」を交わしました。お客さまがサッカーを楽しむ時間を90分のうちわずかでも奪っていないか、足元を見つめ直すために、全試合の所要時間を計測、数値化し、検証を行いました。結果的には異議・遅延行為は確実に減少し、多くのクラブでリスタートや交代に要した時間も短縮しました。一方、世界基準で見た場合、コーナーキックを蹴るまでの時間はF I

Jリーグトップパートナー

Calbee

Canon

KONAMI

AiDEM

Coca-Cola

JCB

明治安田生命

FAワールドカップブラジル大会よりも平均して約4秒遅いことがわかりました。短ければ良いとは一概に言えないものの、考える速さや展開のスピードなど世界との4秒の差にどのような意味があるのかを考えていかなければなりません。

【リーグ戦、リーグカップ戦などを振り返って】

G大阪がJリーグヤマザキナビスコカップ、J1リーグ戦、そして天皇杯全日本サッカー選手権大会と3つのタイトルを獲得し、2000シーズンの鹿島アントラーズ以来2クラブ目となる国内三冠の偉業を達成しました。遠藤保仁選手が最優秀選手賞を受賞するなど、G大阪が復活を遂げた1年でもありました。また、来シーズンのAFCチャンピオンズリーグ(ACL)出場権は、G大阪、浦和、鹿島、柏レイソルの4クラブが獲得しました(柏はプレーオフから出場)。

J2は「縦への美学」を貫き圧倒的な攻撃サッカーで優勝した湘南ベルマーレ、着実に力をつけ入会3年目で初のJ1昇格となった松本山雅FC、J1昇格プレーオフでのGK山岸範宏選手の見事なゴールが記憶に新しいモンテディオ山形の3クラブが、来シーズンはJ1で戦います。地域クラブが力をつけ、確実に実績を上げ始めています。リーグ戦自体もJ1を経験したクラブが増えて年々レベルアップしており、これまで以上に優勝、昇格争いがし烈なものになると予想されます。

今シーズン、11クラブで開催した明治安田生命J3リーグによって、36都道府県にJクラブが広がり裾野が拡大しました。初代チャンピオンにはツエーゲン金沢が輝きました。2015シーズンからは新たにレノファ山口FCがJ3に入会し、Jクラブは37都道府県に広がります。J3は集客面に課題を残すものの、クラブがホームタウンに住む人々や企業、自治体などに少しずつ認知され、徐々に地域に根付いている様子が見えてきます。例えば土地の方言による場内アナウンス、地元ラジオ局のスタジアムDJなど地域の特色を生かし、人々の地道な活動が実ってサッカースタジアムも誕生します。また新しい育成の試みとして、J1・J2の22歳以下の選抜選手で構成されたJリーグ・アンダー22選抜が参戦しました。将来の日本サッカーを背負う若手選手の試合出場機会を増やすことを目的に、99人の選手が出場し、10位でシーズンを終えました。コンディション維持や競技のフェアネスの確保が今後の課題となります。

育成に関連して、次世代を担う選手たちによる第22回Jリーグユース選手権大会は、10年ぶりに鹿島ユースが優勝しました。

【世界に勝つために足りないもの】

タイトル奪還を目指したACLには、柏、横浜FM、セレッソ大阪、サンフレッチェ広島の4クラブが出場しました。それぞれ全力を尽くしたものの、ベスト16までに敗退と大変残念な結果となりました。またFIFAワールドカップブラジル大会ではSAMURAI BLUE(日本代表)がグループステージ敗退。さらにU-16、U-19といったアンダーカテゴリーの日本代表も、各年代別ワールドカップのアジア最終予選で敗退が続くという残念な結果に終わり、こうした状況には強い危機感を抱いております。

一方、明るい話題としては、7月にU-14Jリーグ選抜がこの年代の最大規模の国際ユース大会「Gothia Cup 2014」決勝でドイツのチームを破り優勝しました。無邪気で幼い面を残す選手たちが、気後れすることなく堂々と世界の舞台上で戦い勝ち抜いた功績をたたえたいと思います。

8年後の2022FIFAワールドカップカタール大会を見据え、世界で戦える強い選手を育てるために、Jリーグは日本サッカー協会(JFA)と共に育成改革に着手します。まず、Jクラブの育成組織を評価するシステムの来シーズンからの導入を検討しています。これまで数字で表すことが難しかった育成の評価を、施設や人材、育成組織の持続性など多方面から格付けを行い、数値化することで世界との差を可視化します。さらに少年期から国際大会への出場機会を増やすため、大会誘致や海外遠征の機会を増やし、指導者も国際経験を積む機会を創出するなど、短・中長期の両面から育成への投資を検討しています。

日本代表の強化に向け、またアジアにおけるJリーグのプレゼンス向上のため、JクラブのACL優勝は至上命題です。来シーズンはJFAの協力を仰ぎ、天皇杯でACL出場クラブをシードするなど、レギュレーションの改定を含むカレンダー面を改良することが決定しています。引き続き金銭面や人的サポートも継続し、08年のG大阪以来となるタイトル奪還を目指します。

【2015シーズンに向けて】

Jリーグ開幕以降の20年余りで、関心のある層や入場者数が徐々に減少する現状を踏まえ、あらためてJリーグが取り組むべきことは何かをクラブと話し合った結果、「魅力的なサッカー」を「多くの人に伝える」ことを主眼に置いていくべきだと決意を新たにしました。2015シーズンのJ1大会方式を、従来の1ステージ制から2ステージ+チャンピオンシップ制へ変更するのは、その一環です。新しい大会方式は、年間チャンピオンに加えて各ステージの優勝、短期決戦のチャンピオンシップにより見どころが豊富となり、Jリーグを初めて見る方にもシーズンのどこを切り取っても楽しんでいただけるものとなっています。大会方式の改革に伴って一つ一つの試合への注目度が高まる中、フットボールの魅力の追求がますます重要なものになっていきます。

魅力的なフットボールの実現に向けて、中長期的には先に述べた育成改革を進めるほか、来シーズンはデジタルトラッキングシステムを本格的に導入し、全ての出場選手のパススピード、走力、走行距離などを計測、データ化して徹底的な可視化を図り、正しい現状の分析に生かしてまいります。さらに、臨場感ある環境で試合をお楽しみいただくために、スタジアム開発の推進や、デジタル技術を駆使した多彩なサッカーの楽しみ方も同時に提供してまいります。変革に向けた転換期となる2015シーズンより、J3リーグ戦をご支援いただいていた明治安田生命保険相互会社さまにJリーグタイトルパートナーとしてご支援いただくことになりました。リーグの財政面のみならず、全国の支店からJクラブおよびJリーグを目指すクラブを応援していただきます。大きな後押しを受け、Jリーグは力強く前進してまいります。

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ
チェアマン 村井 満